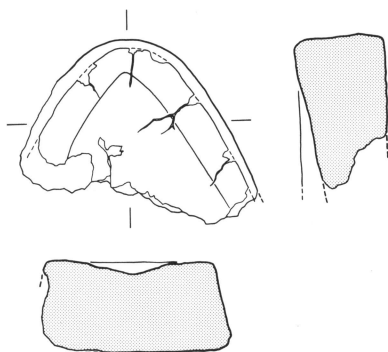


愛知県西尾市 清水遺跡発掘調査報告

—90 A・B区の概要—



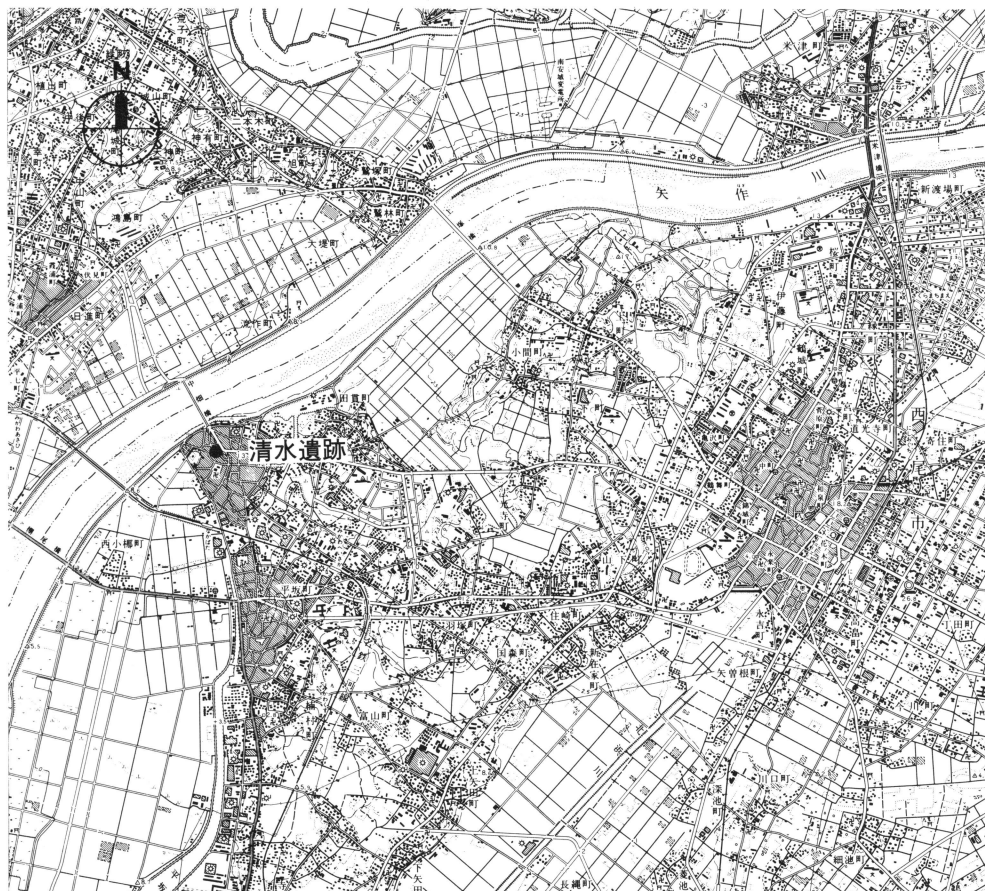
清水遺跡90 B区 S K 36出土犁先鏝型 1 : 8

例 言

- 1 本報告は、愛知県西尾市中畑町字清水に所在する清水遺跡の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査は、矢作川中畑橋の架け替えによる県道平坂・福清水線の付け替え工事に伴う事前調査で、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた(財)愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は、(財)愛知県埋蔵文化財センターの山田 基（調査課主査）尾野善裕（同嘱託員）が担当し、平成2年12月～平成3年3月に実施した。
- 4 調査に際しては、次の関係諸機関、諸氏の御指導・御協力を得た。
愛知県土木部・愛知県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センター・西尾市教育委員会文化係松井直樹氏
- 5 調査区の座標は、建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、これを示した。
- 6 記録作成・遺物整理・製図にあたっては次の方々の協力を得た。
阿部小百合・都築睦美・鈴木香里・石川倫子・山本章子・志賀三津江
稲垣智子・伊佐治民子・加納かず子・斎藤夏美・新美厚子・久永弘子
堀田可代子・三輪はつえ・鋤柄智子・三浦由美・高橋美保・斎藤理
内山伸也・岩越園江
- 7 本報告は、調査課長加藤安信の指導の下、主としてⅠ・Ⅱを山田が、Ⅲ・Ⅳを尾野（現名古屋市見晴台考古資料館学芸員）が分担し、全体を山田が編集した。
- 8 調査記録は(財)愛知県埋蔵文化財センター、出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センター収蔵庫にて保管している。

I 遺跡の位置と環境

清水遺跡は西尾市の西部、西尾市中畑町字清水を中心とした地域に広がる。矢作川を挟んで碧南市に隣接し、矢作川の現河口まで約5kmの矢作川左岸、標高7mの碧海台地（洪積台地）の縁辺部に位置する（第1図）。中世以前は現在の油ヶ淵から西尾市米津町にかけての低地には海域が入り込んで狭い湾になっており、清水遺跡の立地する碧海台地の南北の縁辺は直接三河湾に面していたと考えられる。慶長十年（1605年）に流路の変更がなされ、矢作川は清水遺跡の位置する台地の縁辺を流れるようになった。その結果、矢作川の堆積作用が三河湾に向かって急速に進み台地の縁辺より海域は離れ、さらに江戸時代中期以降は新田開発が進み、海岸線は清水遺跡の乗る台地縁辺から遠のいていった。そして生産性の向上につれて台地上にはより大きな集落が形成されていき、こんにちみられる家並群につながってきているものと考えられる。



第1図 清水遺跡位置図

II 発掘調査に至る経緯と調査の経過

1. 調査にいたる経緯

清水遺跡は、愛知県西尾市中畑町字清水を中心とした地域に位置する。

愛知県土木部は、西尾市と碧南市の境界を流れる矢作川にかかる中畑橋の老朽化と交通量緩和のために、中畑橋を下流に付け替え、新たに県道平坂福清水線と中畑本町線を建設することを計画した。この道路建設予定地の近くには、「清水貝塚」（県遺跡番号55049）として昭和20年代よりその存在が知られている遺跡があり、昭和25年及び31年には南山大学人類学研究所によって調査がなされ、縄文時代晩期から古墳時代にかけての遺構・遺物が検出されている。こうした経緯から、道路建設予定地内にも遺跡が広がっていることが予想され、そのため遺跡範囲を確認する目的で愛知県教育委員会は、道路用地内において昭和63年12月に試掘調査を行った。この結果南山大学の調査地区の西側の沖積面において平安時代の遺物包含層を、若干距離の離れた東側の碧海台地直下の沖積面において縄文時代前期の遺物包含層を、また台地上において中近世とみられる貝層を確認した。これにより従来考えられていた範囲より遺跡は広がり、碧海台地上にも遺跡が存在することが予想されるにいたった。

これらの経緯を経て愛知県教育委員会を通じて県土木部からの委託を受けた（財）愛知県埋蔵文化財センターが平成元年11月から平成2年3月まで道路予定地内2600㎡の発掘調査を実施した。当初計画では試掘調査によって確認された3480㎡が調査範囲であったが、用地未買収となった台地東端の880㎡については、平成2年度まわしとなり、平成2年12月から平成3年3月までの期間で調査を実施した。平成元年度調査分2600㎡については、平成2年度事業として調査報告書（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第25集『清水遺跡』）を作成したが、880㎡の成果はこれに載せることができなかった。このため、その成果をここに報告するものである。

2. 調査の経過

平成2年度調査区は、平成元年度の調査区89B・C区の東側に位置し、排土処理と生活排水路・生活道路確保の面から大きく90A・Bの2区に分けて設定した（第2図）。

平成2年11月末に準備にとりかかり、12月に90A区より表土はぎを実施し調査を開始した。各調査区の面積・調査期間は第1表のとおりである。



第 2 図 90 A ・ B 調査区位置図

調査区	調査面積	1990		1991		
		11	12	1	2	3
90 A	380㎡					
90 B	500㎡					

表土除去 調査 埋め戻し

第 1 表 調査工程表

III 調査結果

1. 90A区

(1)基本層序 (第3図)

①表土・攪乱層、②近世整地層③地山層の3層に大別できる。②層はさらに細分が可能であり、近世を通じて幾度かの整地が繰り返されたことが窺われる。

遺構は、②層の中間、もしくは上面から掘り込まれているものが多く、②層の下面からの掘り込みと考えられる遺構は、SK17・144の2基のみであった。

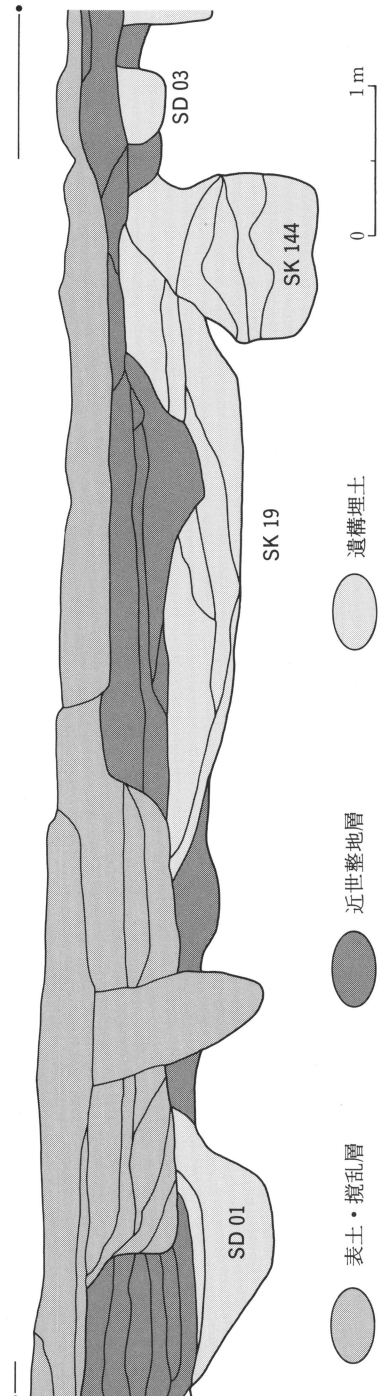
(2)遺構の概要 (第4図)

溝5条・土坑約150基を検出した。

溝は、いずれもほぼN-40°-Wの方向性を有する点で共通する。土坑は大半が平面円形で直径0.2~0.8mの小土坑で占められているが、他に深さ1mを越えるSK17・31・144、平面形の長軸が1.5m以上のSK18・19などの大型土坑がある。

小土坑は、溝と同じN-40°-W、もしくはこれと直交するN-50°-Eの方向性で並ぶ傾向があり、溝となんらかの有機的関連があるものと考えられる。従って、これを溝によって区画された敷地内の掘立柱建物の痕跡と捉えることもあながち不当ではないと思われるが、明確な柱痕跡が検出されていないため断定は避けたい。

また、小土坑内に偏平な形状の石が埋設されているSK01・43・44・143およびSD03については、直線的な配列を示していることから、礎石建物の一部である可能性があるが、間隔が不



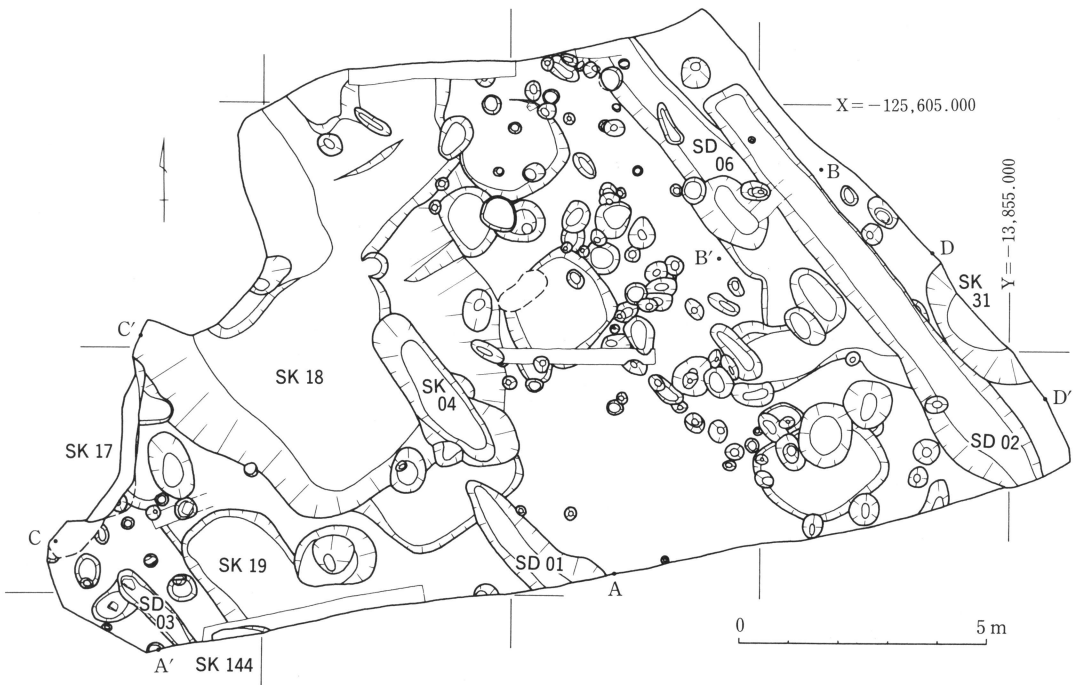
第3図 90A区南壁土層断面図 1:100

均等であり、レベルも一定していないため判断は留保しておきたい。

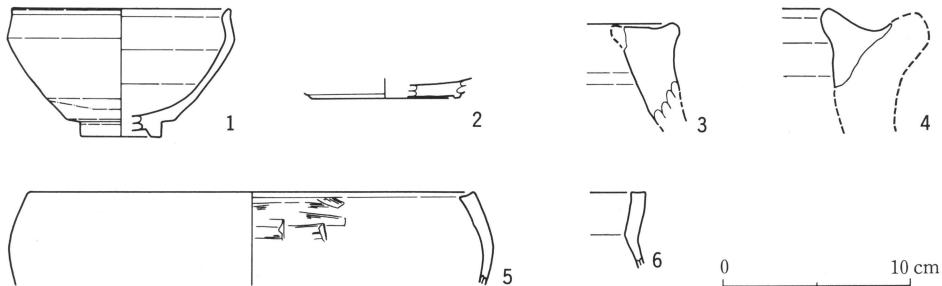
次に、主要遺構（溝・大型土坑）についてやや詳しく記す。

SD01（第5図）

最大幅1.0m、深さ0.4m。埋土は褐灰色土を少量交えるハマグリ・アサリ・カキ・サルボウ・ウミナ科からなる貝層の単一層。掘り込み面は、先に述べた近世整地層の細分した最下層の上面であり、A区の中では比較的古い時期に位置付けられる遺構である。瀬戸・美濃陶器の天目茶碗（1）・志野丸皿（2）、常滑焼の甕（3・4）、土師質土器の鍋（5・6）の他、鉄滓、被熱礫等が出土している。出土遺物の示す年代観は、概ね17世紀代の



第4図 90A区遺構平面図 1:150

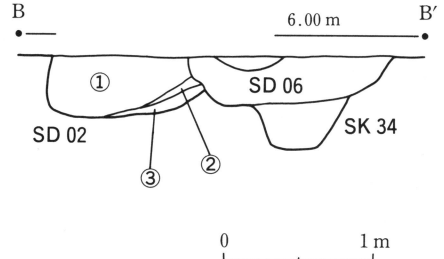


第5図 SD01出土遺物実測図 1:4

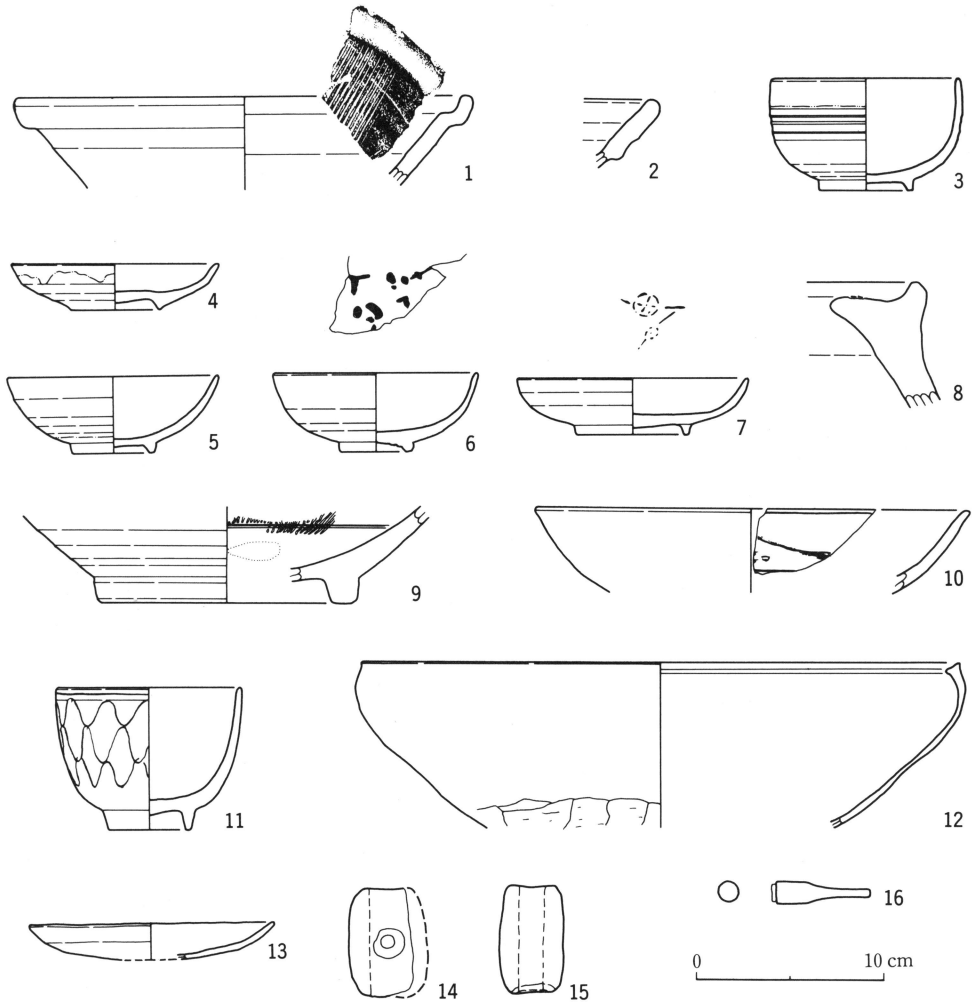
範囲に収まることから、遺構の埋没時期については17世紀後葉と考えたい。

SD02 (第6・7図)

幅1.0m、深さ0.4m。断面形態は隅丸方形を呈し、西方の肩をSD06に切られる。埋土はアサリを主体としてカキ、ウミナナ科の混じる混土貝層(第6図①)の上層と、にぶい黄橙色土層(同②)・灰褐色土層(同③)の下層に大別でき、遺物のほとんどが上層から拳の大きさ程度の礫と共に投棄された状態で出土している。



第6図 SD02土層断面図 1:50



第7図 SD02出土遺物実測図 1:4

人工遺物には瀬戸・美濃陶器の播鉢（1・2）・腰錆茶碗（3）・鉄釉皿（4）・灰釉皿（5）・梅文皿（6）・御深井釉摺絵皿（7）、常滑焼の甕（8）、肥前系陶器（唐津）の鉢（9）、肥前系磁器（伊万里）の皿（10）・碗（11）、土師質土器の鍋（12）・炮烙・皿（13：非ロクロ成形）の他、管状土錘（14：常滑焼・15：土師質）、煙管（16）等がある。自然遺物としては、上記貝類の他に小獣骨（或いは鳥骨か？）が出土している。出土遺物の示す暦年代は、肥前系陶磁器が概ね18世紀代であるのに対して、瀬戸・美濃陶器では梅文皿等の存在から18世紀末～19世紀前半とやや新相となる傾向がある。

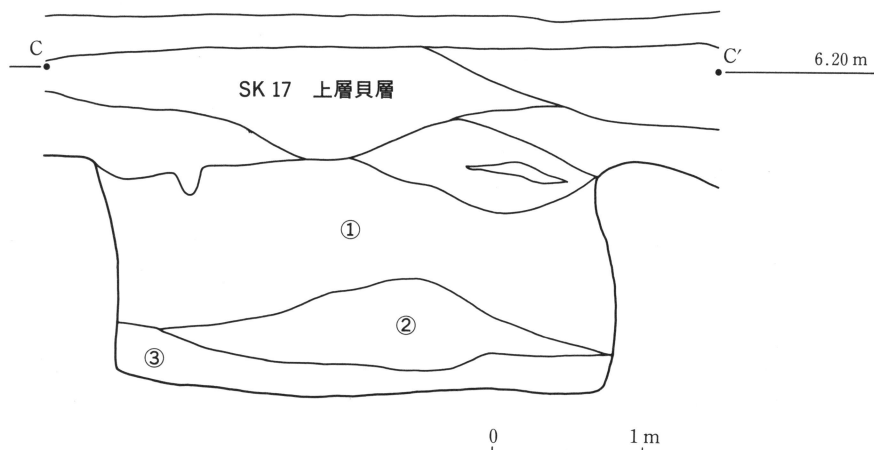
SD03

幅0.5m、深さ0.3m。埋土は黒褐色土が僅かに混じるハマグリ主体の貝層。人工遺物は全く出土していない。

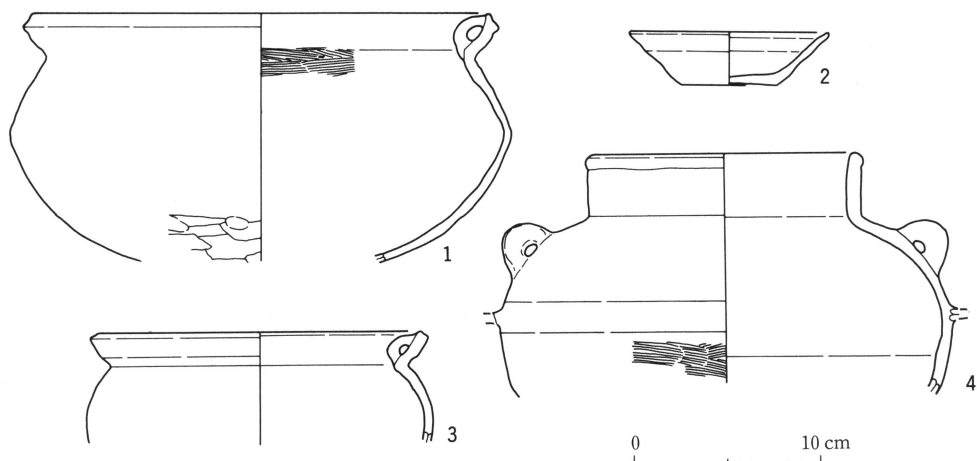
SK17（第8・9図）

遺構が調査区域外まで広がっているため、平面形の全体像を窺い得ないが、検出部分から推定すると一辺3.3m前後の隅丸方形を呈すると思われる。検出面からの深さは1.6m。遺構上面を削平されている可能性もあるため、本来の掘り込み面は検出面よりさらに上位にあったことも考えられる。埋土は、上層から①灰黄褐色土層、②カキ・アサリ・ハマグリ・ウミナ科から成る黒色土混じりの貝層、③黄褐色砂質土層の3層に分かれている。このうち①層は地山質のブロック土で、堆積状況から人為的な埋め戻し土と判断される。

出土した人工遺物は僅少で、①層（SK17中間層）から土師質土器の鍋（1・3）・茶釜形羽釜（2）・皿（4：ロクロ成形）が出土しているに過ぎない。③層は全くの無遺物層である。尚、①層より上位に堆積していた混土貝層をSK17上層として遺物取り上げを行ったが、これはSK17埋没後の整地層と考えられるため、ここでは除外しておく。



第8図 SK17土層断面図 1:50



第9図 SK17出土遺物実測図 1:4

SK17の性格については、②層に貝層が形成されており、一時廃棄物処理坑として利用されていたことが知られるが、埋土最下層の③層が無遺物層の自然流入土とみられることから、掘削した当初の目的は別にあったと考えられる。従って、SK17の開削から埋没に至る経過には少なくとも次の4段階があったものと推定される。

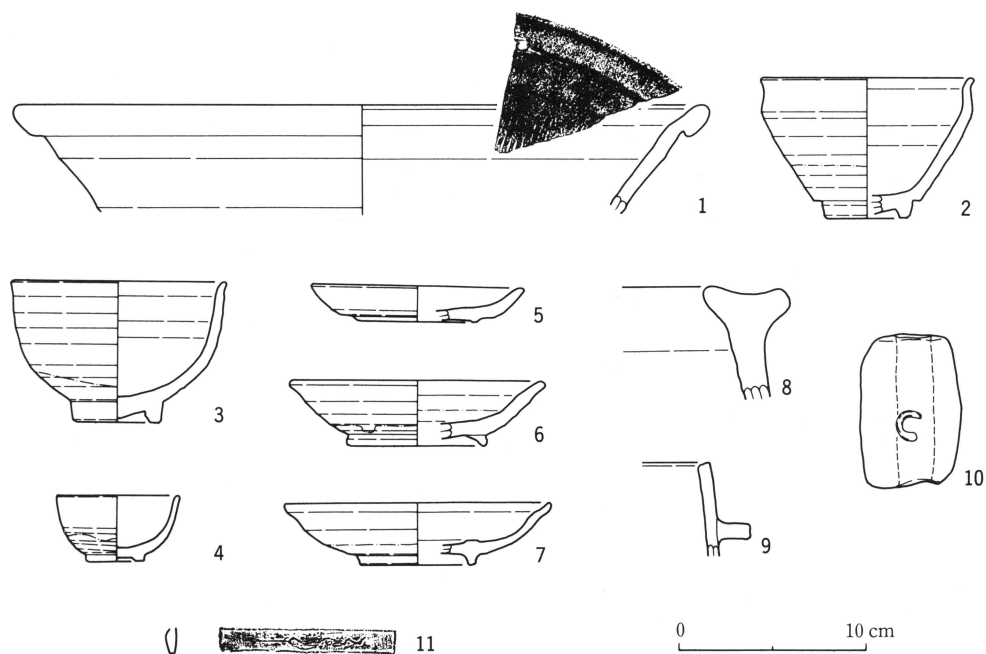
1. 廃棄物処理以外の目的で開削
2. 土砂の自然流入による③層の形成
3. 廃棄物処理坑への転用（②層の形成）
4. 地山質土による人為的埋め戻し（①層の形成）

遺構の開削、埋没時期については、出土の人工遺物が未だ編年の確立していない土師質土器のみであるため不確定要素を多分に含むが、鍋の形状からみて戦国時代（16世紀前半）にまでさかのぼる可能性がある。

SK18（第10図）

平面不整形を呈する大型土坑。SK17や後述のSK31・144と異なり、深さ0.8mと浅いが、広い面積を掘り込んでいる。埋土はアサリを主体とする混土貝層（SK18下層）である。埋土の上面には、赤褐色土層（SK18中間層）を介在して、さらに混土貝層（SK18上層）の堆積が認められたが、これは赤褐色土層と共にSK18埋没後の整地層と考えられた。従って、赤褐色土層より下層の混土貝層（SK18下層）中の遺物のみが本来的にSK18に伴うものと見なされる。

人工遺物としては、瀬戸・美濃陶器の播鉢（1）・天目茶碗（2）・鉄釉丸碗（3）・鉄釉小碗（4）・志野丸皿（5）・輪禿皿（6・7）、常滑焼の甕（8）、土師質土器の羽釜（9）、管状土錘（10：常滑焼）、小柄の柄（11）等がある。出土遺物の年代観からみて、



第10図 SK18出土遺物実測図 1:4

遺構の埋没は、18世紀代と推定される。

SK19 (第11・12図)

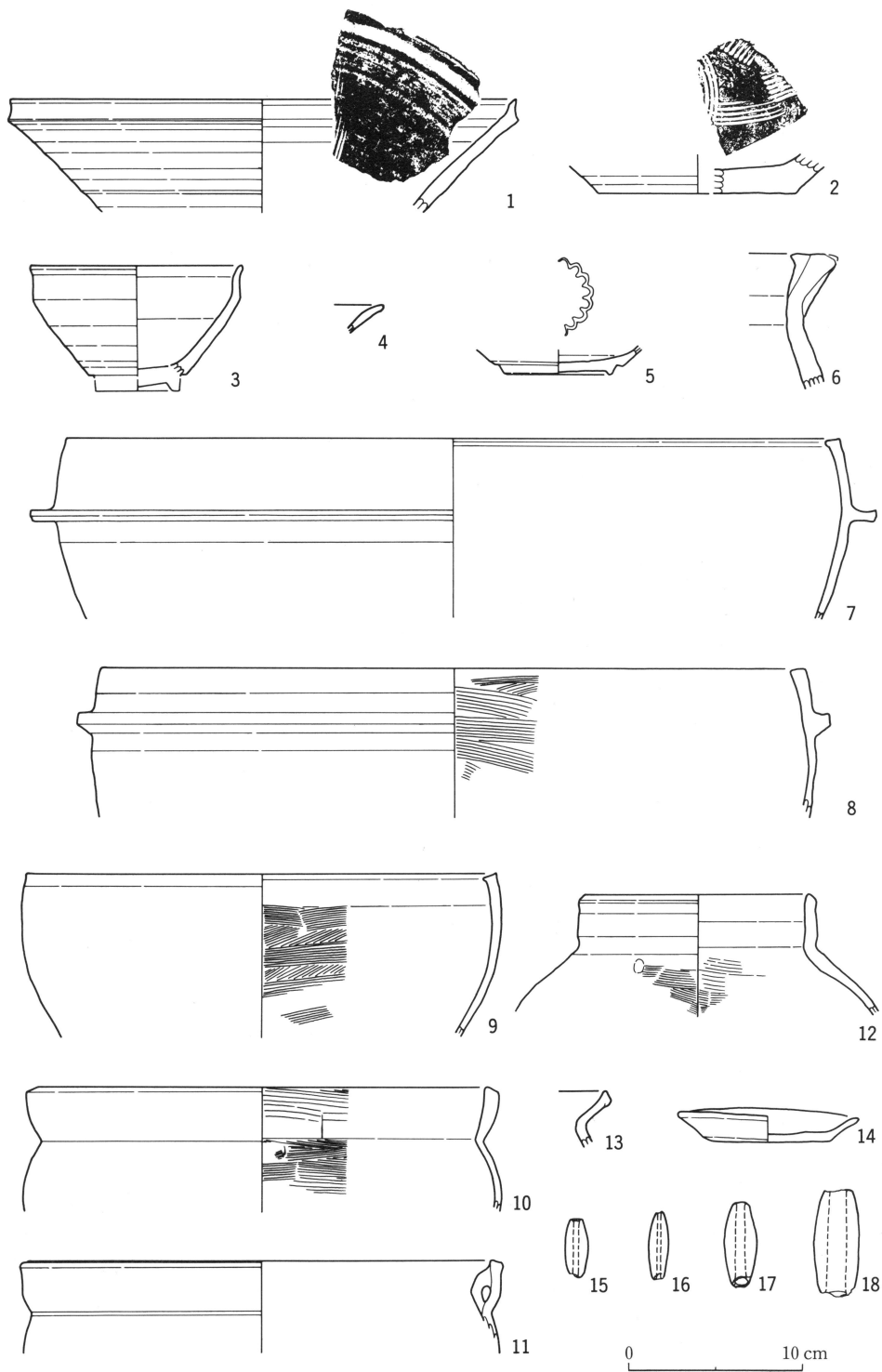
長径4m以上、深さ0.7mの平面不整形土坑。埋土は、ハマグリ・カキ・アサリ・シオフキ・ウミナ科から成る混土貝層の上層(第3図①)と、褐色系土層の下層(第3図②～⑥)に大別でき、下層は色調によりさらに細分が可能である。

遺物は、上層と下層に分けて取り上げを行っているが、いずれも焼土塊や被熱礫と共に投棄された状態で出土した。

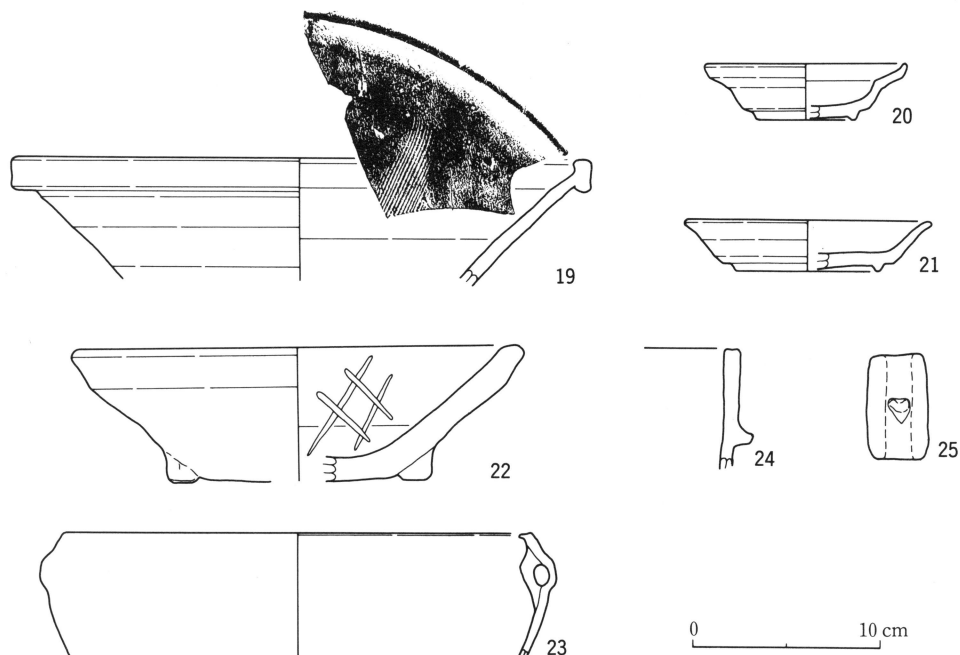
下層からは、瀬戸・美濃陶器の播鉢(1・2)・天目茶碗(3)・稜皿(4)・志野丸皿(5)、常滑焼の甕(6)、土師質土器の羽釜(7・8)・鍋(9～12)・皿(14:非ロクロ成形)、管状土錘(15～18:土師質)、鉄滓等が出土している。

一方、上層出土の遺物には、瀬戸・美濃陶器の播鉢(19)・志野折縁皿(20)・反り皿(21)、常滑焼の鉢(22)、土師質土器の鍋(23)・羽釜(24)、管状土錘(25:常滑焼)等の他、自然遺物として上記貝類以外に獣骨がある。

出土遺物には、下層の一部に16世紀代にさかのぼるものが少量あるものの、他は上・下層共17世紀代に収まっており、確実に18世紀代に下るものはない。従って、遺構の埋没時期は17世紀後半と考えられる。



第II図 SKI9下層出土遺物実測図 1 : 4

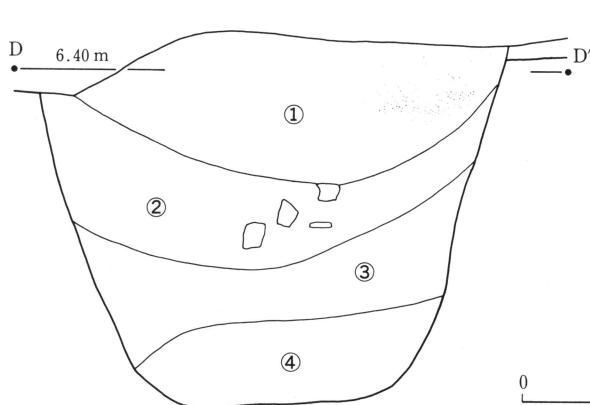


第12図 S K19上層出土遺物実測図 1 : 4

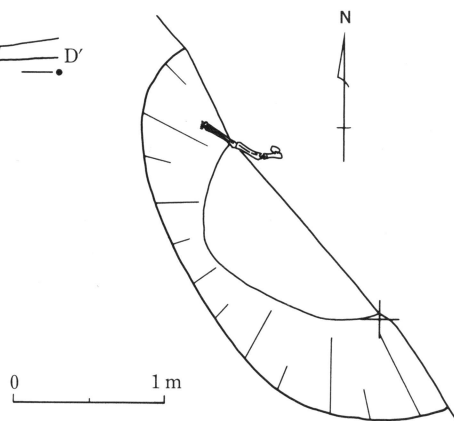
S K31 (第13・14・15図)

深さ2.4mの大型土坑。埋土は上層から、①アサリを主体とし、カキ・マテガイ・ウミミナ科の混じる混土貝層、②黄褐色土層、③褐色砂質土層、④灰黄褐色砂質土層の4層に分かれる。このうち②層には、拳大～人頭大の礫多数が含まれており、獣骨・陶磁器類等遺物の多くがこの層から出土している。

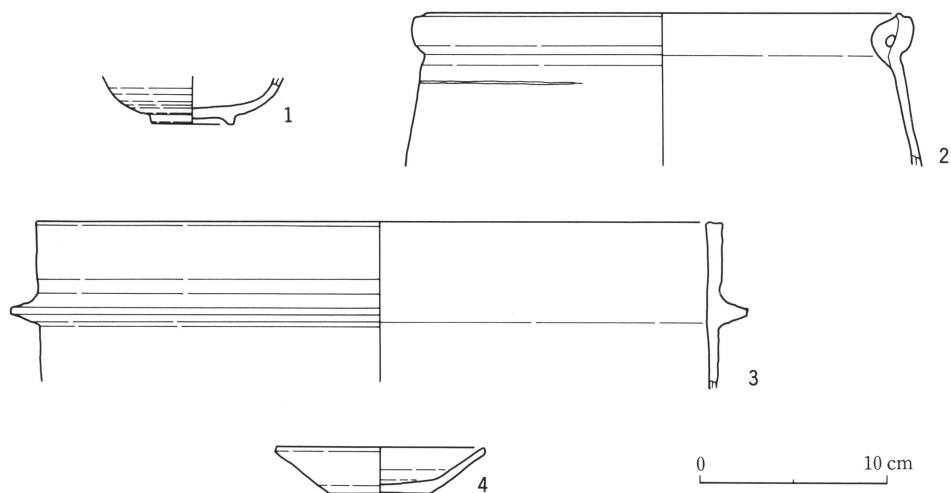
出土した人工遺物には、瀬戸・美濃陶器の腰鍔茶碗(1)、土師質土器の鍋(2)・羽釜(3)・皿(4：ロクロ成形)、いぶし瓦等がある。出土遺物の年代観からみて、遺構の埋没時期は18世紀代と推定される。



第13図 S K31土層断面図 1 : 50



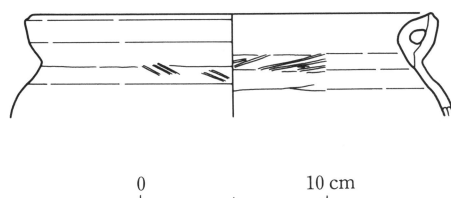
第14図 S K31獣骨出土状態図 1 : 50



第15図 S K 31出土遺物実測図 1 : 4

S K 144 (第16図)

深さ1.3mの大型土坑。前述のS K 19に遺構上面を切られているため、本来の掘り込みはさらに深かった可能性が高い。埋土は上層から、①灰褐色～橙色を呈する地山質ブロック土層、②ハマグリを主体とし、カキ・アサリを含む混土貝層、③褐色土層の3層に大別できる。



第16図 S K 144出土遺物実測図 1 : 4

人工遺物は、①層中から土師質土器の鍋（1）が出土しているのみである。

S K 144は遺構の規模がやや小型である点を除くと、埋土・出土遺物のあり方共S K 17に酷似しており、遺構の性格・時期が共通しているものと考えられる。

2. 90B区

(1)基本層序

調査区のほぼ全面にわたって、遺構検出面である地山面直下が表土・攪乱層で覆われており、90A区でみられた近世整地層は調査区東端で僅かに認められたに過ぎない。調査区域内の2ヶ所で、地山層に及ぶ重機掘削痕跡が検出されていることからみて、本調査区は近年の整地に伴って大規模に攪乱を受けたことにより、包含層（近世整地層）の大半が失われているものと考えられる。

(2)遺構の概要（第17図）

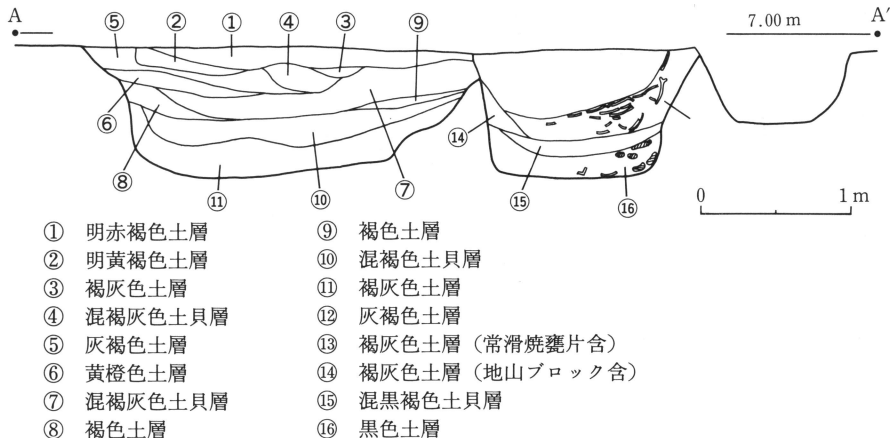
土坑約70基を検出しているが、このうち14基は明らかに明治期以降の遺物を含む攪乱である。また他の土坑についても、埋没時期が確実に近世以前にさかのぼると考えられるものは少なく、大半が幕末・明治期（19世紀第3四半期）若しくは時期不明である。

90B区においても、遺構はN-40°-W、あるいはN-50°-Wの方向性で並ぶ傾向が認められ、この点では90A区と類似した状況を示す。但し、90B区では、90A区と比較して小土坑が少なく、遺構の分布密度自体が低くなっている。これは、90B区側に元々遺構が少なかった可能性もある一方で、上述のように攪乱が深くまで達していることを考慮するならば、掘り込みの浅い遺構が削平されて消滅した結果と考えられよう。

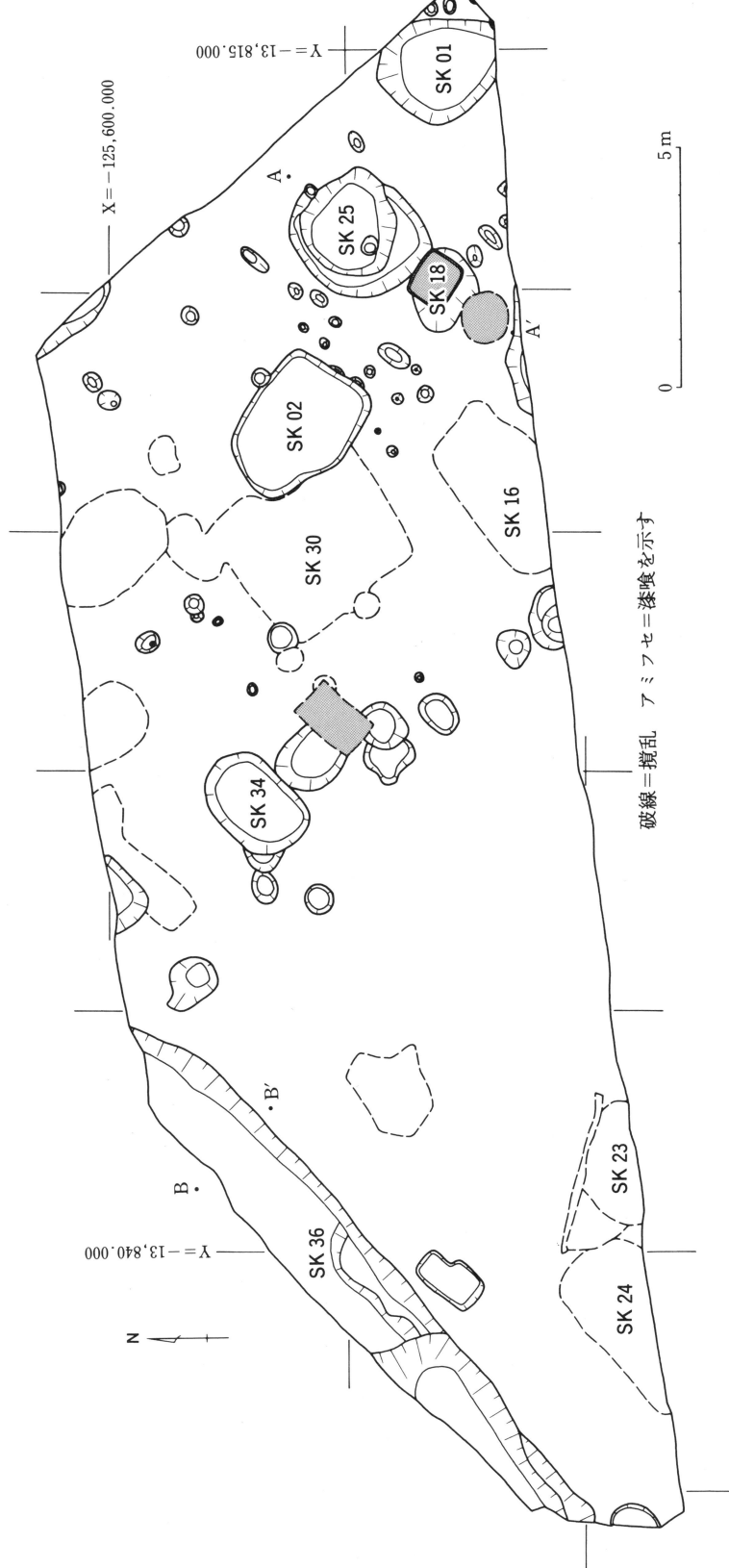
以下、90B区で検討しえた数少ない近世遺構SK25・36について詳述する。

SK25（第18・19図）

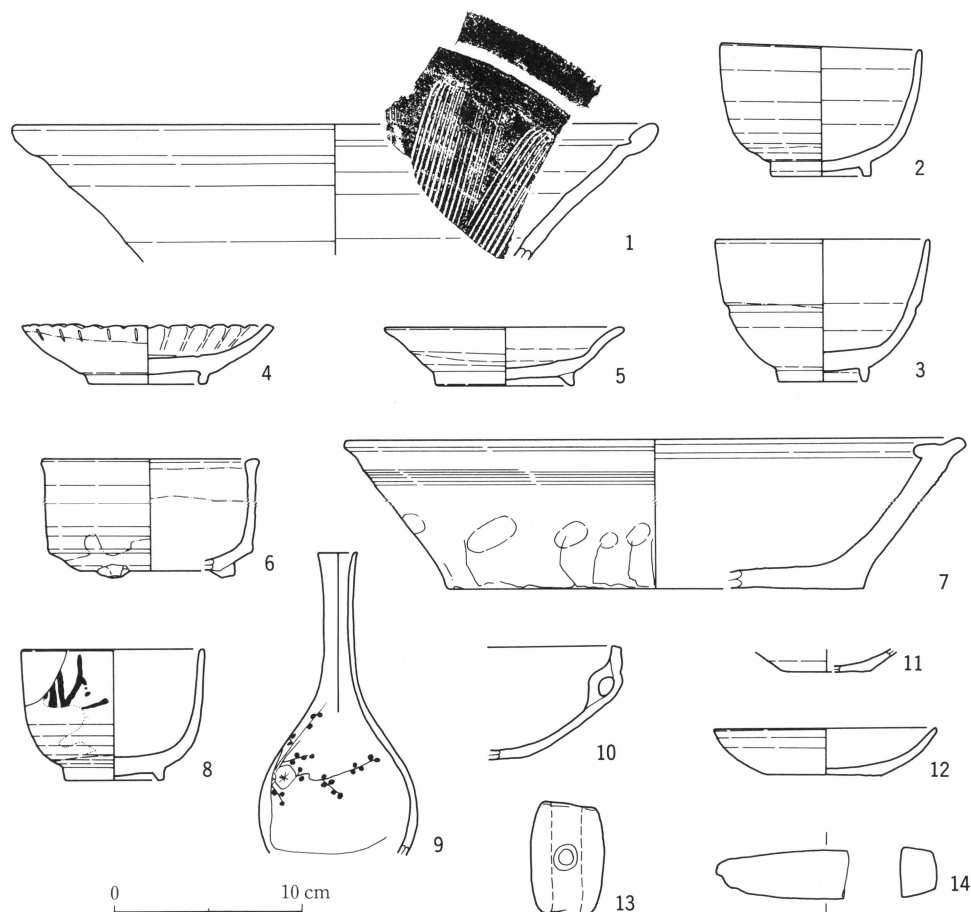
長径3.0m、短径2.4mの不整円形プランを呈する土坑。深さ0.9m。西端を幕末ごろの土坑SK18に切られる。埋土は合わせて11層に細分が可能で、④・⑩層にはほぼハマグリの



第17図 SK18・25土層断面図 1:50



第18図 90B区遺構平面図 1:150



第19図 S K 25出土遺物実測図

みからなる貝層の形成も認められる。

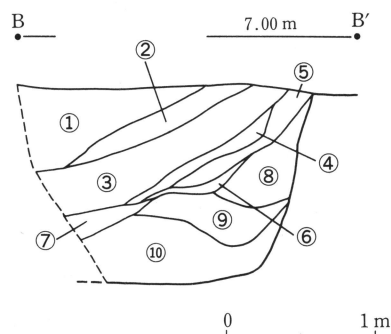
出土した人工遺物には、瀬戸・美濃陶器の播鉢（1）・丸碗（2・3）・菊皿（4）・輪禿皿（5）・香炉（6）、常滑焼の鉢（7）、京焼風陶器の御室茶碗（8）、肥前系磁器（伊万里）の瓶（9）、土師質土器の鍋（10）・皿（11・12：ロクロ形成）、管状土錘（13：常滑焼）、砥石（14）等がある。

遺構の埋没時期は、出土遺物に所謂くらわんか手の肥前系磁器を欠くことや、瀬戸・美濃陶器の示す年代観から、17世紀末～18世紀前葉と考えられる。

S K 36（第20・21・22・23図）

長径14.0m以上、短径2.0m以上、深さ1.8mの大型土坑。調査区域内では遺構の一部を検出したに過ぎず、平面形の全体像は窺い得ない。あるいは溝と見なすべきであるかもしれないが、本報告では調査時の遺構番号をそのまま用いている関係上、便宜的に土坑としておく。埋土は、B-B'断面で①混貝黒褐色土層、②混貝明褐色土層、③黒褐色土層、④混

黒褐色土貝層、⑤褐灰色土層、⑥混黒褐色土貝層、⑦褐色土層、⑧褐色土層（黒色土混じり）、⑨混灰褐色土貝層、⑩褐色土層の10層に細分でき、最下層の⑩層が砂質である他はいずれも僅かに粘性を有する。埋土の堆積状態は、⑧・⑨層が北東から南西方向へ傾斜していたのに対して、①～⑦層は南東から北西方向への傾きを示していた。

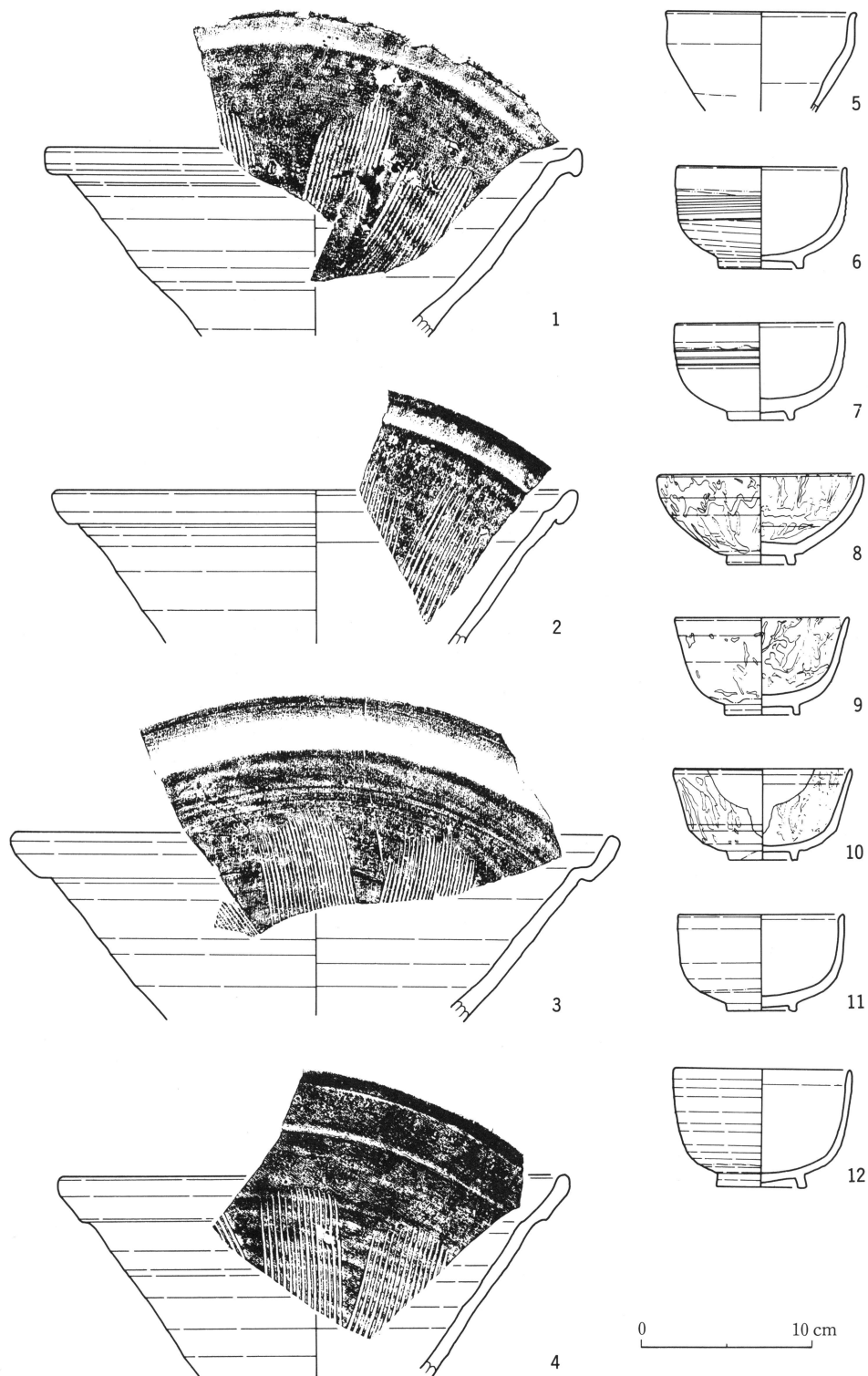


第20図 S K 36土層断面図 1 : 50

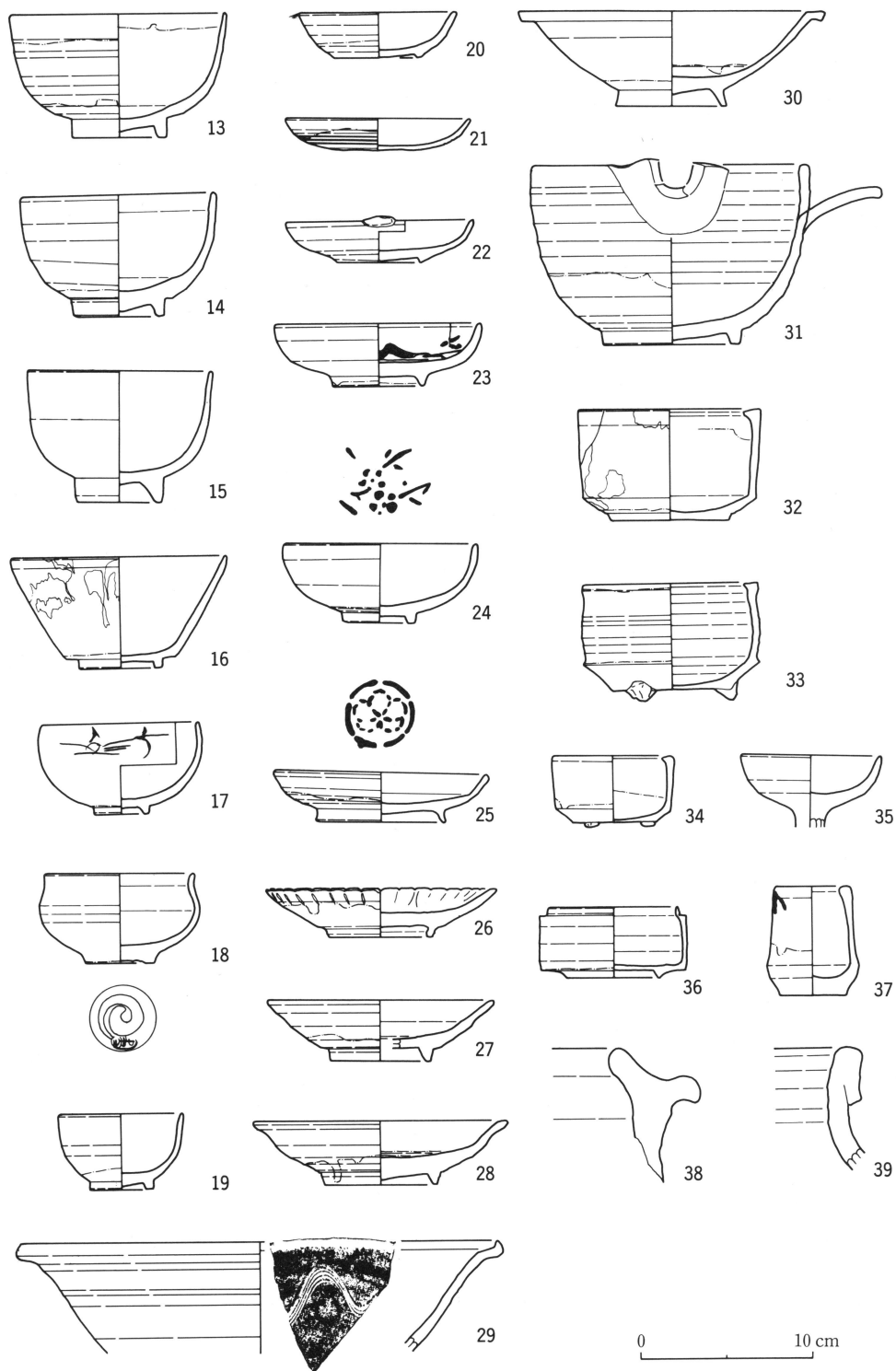
以上の所見から、S K 36については、当初の構築目的は不明であるものの、後に廃棄物処理坑に転用されたものと考えられ、不要物の投棄は初期には北東側からであったものが、ある時点で南西側に変化していることが窺い知れる。

出土した人工遺物としては、瀬戸・美濃陶器の播鉢（1～4）・天目茶碗（5）・腰鍔茶碗（6・7）・刷毛目碗（8～10）・丸碗（11・12・14）・鉄絵湯呑（17）・小碗（19）・志野丸皿（21）・灯明皿（21・22）・染付皿（23）・梅文皿（24）・摺絵皿（25）・菊皿（26）・輪禿皿（27・28・30）・黄瀬戸鉢（29）・片口（31）・香炉（32～34）・仏飴具（35）・合子（36）、常滑焼の甕（38～41）・鉢（42）、肥前系陶器（唐津）の碗、肥前系磁器（伊万里）の碗（44～47）、京焼風陶器の呉器手碗（15）、土師質土器の鍋（48・49）・炮烙（50・51）・羽釜（52）・行平（53）・陶丸（54）、土人形（55）、いぶし瓦（56）、土錘（57：常滑焼・58：土師質）、砥石（59）、銅銭（皇宋通宝・寛永通宝）等の他、犁先鋳型（中表紙）、鉄滓等の鋳造関連遺物がある。

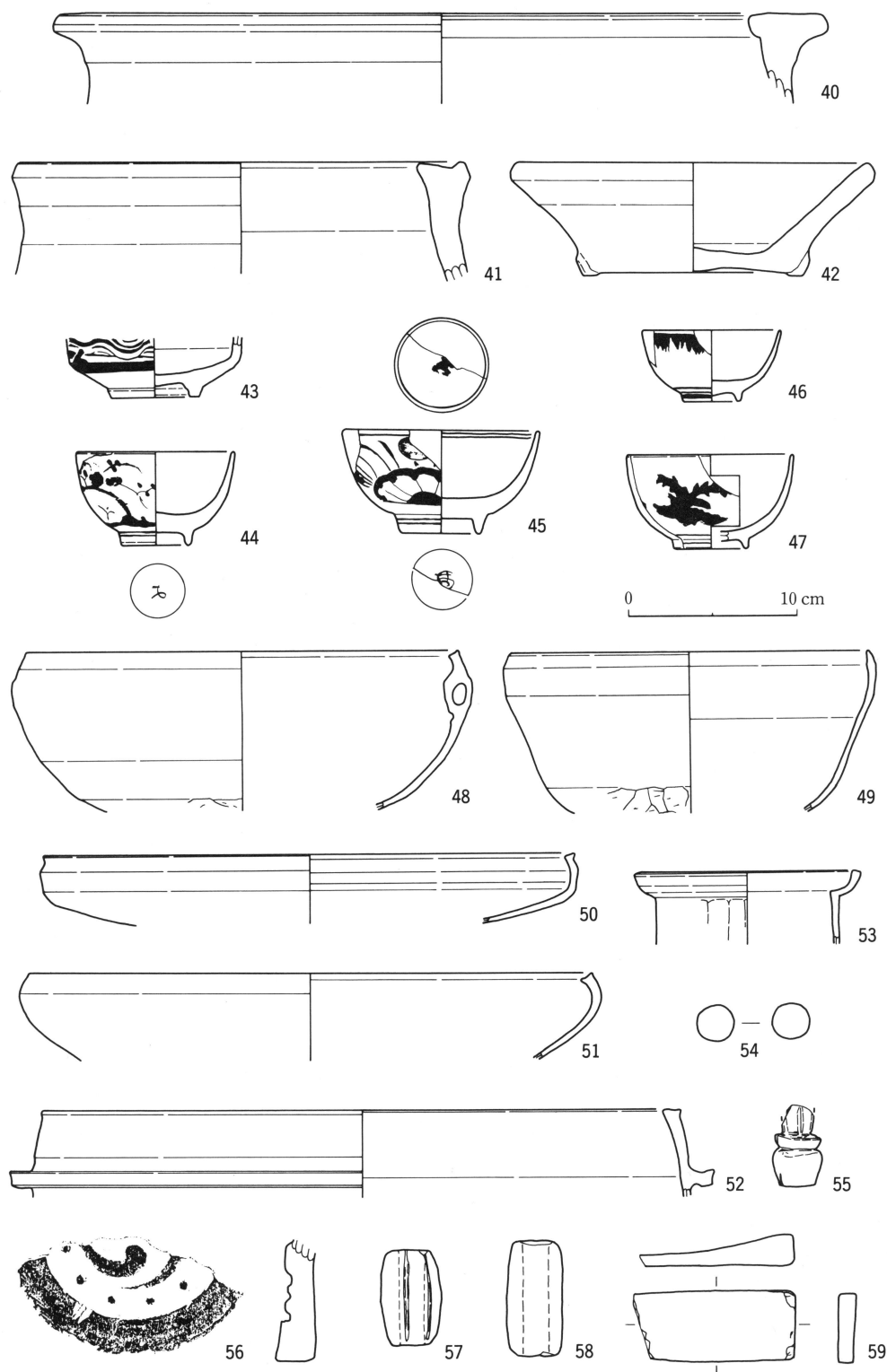
出土遺物の示す暦年代は、17・18世紀代にまでさかのぼるものも少なくないが、瀬戸・美濃陶器の中には播鉢（4）・刷毛目碗（8～10）など19世紀前半まで降りるものがある。但し、19世紀第3四半期以降の瀬戸新製焼（瀬戸・美濃磁器）は認められないため、S K 36は幕末以前に埋没していたと考えられる。



第21図 S K 36出土遺物実測図(1) 1 : 4



第22図 S K 36出土遺物実測図(2) 1 : 4



第23図 S K 36出土遺物実測図(3) 1 : 4

IV まとめ

今回の発掘調査では、戦国時代から近世の遺構をまとめて検出することができた。90A・B区検出の遺構の性格については、既に昨年度年報でも若干言及したところではあるが²⁾、整理作業を進めた結果、前稿の内容を一部修正する必要性も生じてきている。そこで、以下では、前章に記した調査概要を踏まえて、再度、清水遺跡90A・B区の性格について考えてみることにしたい。

90A・B区で検出した遺構は、①溝、②小土坑群、③大型土坑の3類に大別できる。このうち、①溝と②小土坑群については、それぞれ敷地の区画溝と掘立柱建物の柱穴と見なし得る可能性を前章で指摘した。一方、③大型土坑については、a不整形で平面的に広く掘り込み、全体の形状が皿型を成すもの（例えば90A区SK18・19）、b隅丸方形などの比較的整った平面形を有し、深さ1m以上の深い掘り込みを伴うもの（例えば90A区SK17・31・144、90B区SK36）の2種があり、前者は遺物の出土状況からみて廃棄物の処理坑（所謂廃棄土坑）とみなして支障ないと思われる。これに対して、後者は、埋土最下層が無遺物層であったり、地山質土での人為的埋め戻しが認められたりすることから、掘削当初から廃棄物の処理を目的としたものとは考えにくい。このため前稿では、今次調査で出土した鉄滓・犁先鋳型等の鑄造関連遺物とからめて、これらが鑄物砂の採掘坑である可能性を想定したのであった。しかるに、出土遺物の整理を進めたところ、鑄物砂採掘坑と考えたSK17が16世紀代にまでさかのぼる可能性の高いことが判明した。これは古文書等から知られる当地（現西尾市平坂町・中畑町一帯）の鑄造業の開始³⁾（17世紀後半）よりも古く、b種大型土坑を鑄物砂の採掘坑とみなすことに対して否定的である。

事実、鑄造関連遺物（鉄滓・鋳型）の出土している遺構（90A区SD01・SK19、90B区SK36）の埋没年代はいずれも17世紀後半以降であり、この点からも16世紀代にまでさかのぼる可能性のあるb種大型土坑と鑄造業の関連性は希薄と言わざるを得ない。

従って、b種大型土坑の性格については、鑄物砂の採掘坑以外に求めなければならないと思われる。

翻って、今次調査に於ける出土遺物を概観してみると、人工遺物としては土器・陶磁器類、土錘、鉄滓、鋳型、銭貨など、自然遺物としては貝類、獣骨等から構成されている。このうち、土錘（漁網錘）や鉄滓・鋳型などの遺物は、直接的に当地に於ける漁業・鑄造業といった産業活動の形跡と見ることができようが、実はこれらが全遺物の中に占める割合はそれほど高いものではない。むしろ遺物の圧倒的多数は、人工遺物としては土器・陶

磁器類、自然遺物にあっては貝類であり、これらは産業活動よりもむしろ日常生活に伴う廃棄物としての性格が強いと思われる。これを検出遺構からみた「溝によって区画された建物群」というイメージと重ね合わせて考えるならば、“町屋”的空間を想定することが最も妥当かと考える。

現在のところ、県下近隣での近世町屋の発掘例は少ないため、近世に於ける当地方の町屋の一般的なあり方は判然としない。このため、上述の推定を裏付ける適当な比較事例を知らないが、若干性格の異なったところで、旧名古屋城下の下級武家屋敷地区にあたる名古屋市竪三蔵通遺跡のあり方と較べてみると、柱穴状の小土坑に混じって大型土坑が点在するあり方は極めて良く似ていると言える。従って、b種大型土坑についても竪三蔵通遺跡の同種の遺構と同様の性格を類推できそうであるが、残念ながら竪三蔵通遺跡に於いてもこれら大型土坑の性格については、一部が穴蔵かと推定されている他にはその性格が十分に明らかになっていないのが現状である⁴⁾。このため本報告ではb種大型土坑の性格については、穴蔵となる可能性を留保しつつ、最終判断を避けておきたい。

註

- 1) 本報告で攪乱として取り扱っている土坑の一部からは、明白な近代以降の遺物と共に、確実に近世後期にさかのぼると考えられる遺物が一括廃棄の状態で出土している。従って、近世末期の本遺跡を考える上で、これらを攪乱として無視することには問題もあろうが、ここでは紙幅の都合もあり、明治期以降の遺物を含む遺構については、すべて便宜的に攪乱としている。
- 2) 尾野善裕「清水遺跡出土の鉄滓と三州平坂鋳物師」『愛知県埋蔵文化財センター年報』（平成2年度）1991
- 3) 平坂の鋳造業の開始時期については諸説あるが、杉田公弘「平坂の鋳物業」『西尾市史三』1976に詳しく述べられている。
- 4) 水野裕之『竪三蔵通遺跡－第11次調査の概要－』名古屋市教育委員会 1991

補注

本報告で用いた出土遺物の年代観は、概ね下記文献に依拠している。

藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』V 1986

藤澤良祐「本業焼の研究(1)～(3)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』VI～VIII 1987～1989

中野晴久「近世常滑焼における甕の編年の研究ノート」『常滑市民俗資料研究紀要』II 1986

大橋康二『肥前陶磁』ニューサイエンス社 1989



90 A 区全景



90 B 区全景



90A区全景



90A区S D02



90A区S D02遺物出土状況



90A区S D03 S K01・44・143



90A区S K17



90A区S K17遺物出土状況



90 A 区 S K 19



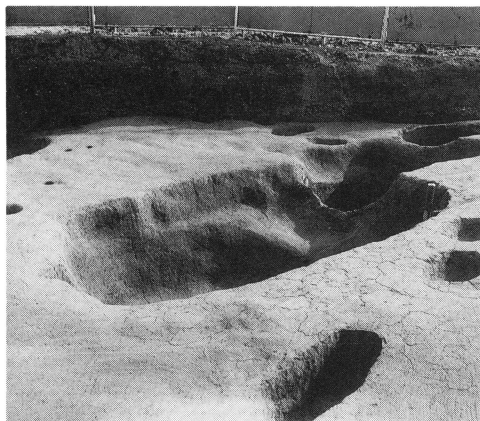
90 A 区 S K 31



90 A 区 S K 31遺物出土状況



90 B 区 S K 18



90 B 区 S K 25



90 B 区 S K 16土層断面